

2015.7.12 年間第15主日

12 弟子を派遣する

マルコによる福音 6:7-13

(そのとき、イエスは) 十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。また、こうも言われた。「どこでも、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさい。しかし、あなたがたを迎え入れず、あなたがたに耳を傾けようとしめない所があったら、そこを出ていくとき、彼らへの証しとして足の裏の埃を払い落とさなさい。」十二人は出かけて行って、悔い改めさせるために宣教した。そして、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人をいやした。

説教

きょうのテキストにはイエスが12人の弟子を派遣した出来事が書いてあります。弟子たちを呼び寄せて二人一組にして何も持たずに（杖と靴は許可して、食べ物、お金、衣服には厳しい制限をした）移動に関しての心得を命じ、また派遣先での心得（一軒に留まれ、受け入れられないときは、さっさとあきらめて次に向かえ）といったとあります。そして弟子たちは成功して戻ってきました。実のところいままでのわたしは、そうですか、ほんとうに大変ですねぐらいしか思い浮かびませんでした。普通はそんな感想を持つだけでしょ。ではこの箇所を深読み（ちょっとずれるかも）するとどうなるか。

わたしが平信徒のときに教会のお勉強会というか実践学習会のようなものに参加しました。それは二人一組で町にでて祈りながら一回りして、戻ってきたら各チームで感想を述べ合う（分かち合う）というものでした。旧約ヨナ

書の二ネベの悔い改めにちなんだ訓練プログラムだと説明されました。ヨナ書ではイスラエルの当面の敵国であるアッシリアの都、二ネベの町に神への立ち返り、悔い改めを告げ知らせよと神がヨナに派遣を命じます。ヨナは派遣命令にさからって（ヨナからすれば利敵行為になるとおもったのかもしれない）逃げ出し、くじらに飲み込まれたりする騒動のあと、再度の宣教派遣命令に従い二ネベに行くと、二ネベの王をはじめ人々は悔い改めたので神は二ネベを滅ぼすことを思いとどまった、とあります。

この故事にちなんだ訓練の目的は町の浄化にあったようです。本格的にやるときょうのテキストのような心得（持つな、留まれ、足の裏の埃を払え）などを実践するのだそうで、講師の牧師はじぶんのところの教会では川崎のソープ街をグルグル回っているといっていました。

そういえば、町にでて知り合いにあっても挨拶をしてはならない、という心得もこの訓練の時に付け加えられていました。

財布も袋も履物も持って行くな。途中でだれにも挨拶をするな。 ルカ 10:4

どうもこの聖句にちなんで追加したのではないかと後になって気づきました。この訓練は祈りの訓練の一環としてプログラムだったのですが、二人一組で祈りながら町を回ると汚れた町が浄化されるということを感じて実践するのだそうです。バカげたことです。これには後日談があって神学校の同窓生がこの二人一組伝道をやっている本家ほんもとの教会の神学生でした。雑談のなかでこの訓練の話がでて、わたしはそうと知ったのですが、面と向かって馬鹿げているよともいえず、おれもやったことがあるといたら、相手の無言の中で哀れみの情というか、お互いにやるせない感じになったことを憶えています。

さて、きょうのテキストですがある方の解説、解釈を読んでいたら、これはイエスが実際におこなった出来事ではなく、初代教会の聖職者派遣式のセレ

モニーを描写したものだろうとありました。わたしはなるほどと合点し、いままでよくわからなかった点がはっきりしてきました。

<イエスはプラス思考>

福音書全体から受けるイエスの印象はプラス思考です。というのは旧約の預言者はさきほどのヨナを筆頭にだいたい預言者になることを嫌がっています。喜んで手を上げたとあるのは預言者イザヤぐらいで、たいていの預言者はいやいやになった、どちらかといえば預言者に任命されたことをマイナスと捉えている印象があります。

でも、イエスは預言者以上の者と呼ばれているだけあってか、よろこんで自分の使命を遂行している印象を受けます。

<そんなイエスがうるさいことを言う>

あれをやっちゃだめ、これもダメと弟子たちの派遣に関してあれこれ注文をつけるイエスは福音書のなかではめずらしい、これじゃマイナス思考のイエスさまです。でもこれが初代教会のセレモニーだとしたら合点がいきます。ルカの10章だけにある72人の派遣のエピソードもどうして書いてあるのかの説明もつきます。ルカは12人より72人とどんどん教会の勢力が増していったことを表そうとしたのでしょう。

<イエスのように生きるとは>

福音書のイエスは旅人です。

狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。 マタイ 8:20

これがイエスの生活でした。旅から旅へ、生まれ故郷に行ったのも決して帰省ではなく旅の一部でした。そしてイエスに従うということは文字通りイエスと共に旅から旅への生活をするということに他なりませんでした。

イエスのたびの目的の一つは宣教（神の国は近づいた）と病気治し（盲人の目は開き、足萎えの人は歩く）でした。きょうのテキストで弟子たちは派遣され、そこで何をするかというイエスと同じこと、宣教して病気治しをしました。そしてそれができたと書いてあります。

自分のことを巡回伝道者と名乗る岸義紘さんがいます。わたしの恩師で、出身校の校長だった人です。神学校の校長なので教鞭もとります。（イエスも弟子たちを教えました）日曜日にくるまに乗って呼ばれればどこの教会にも行って伝道をしています。その伝道の内容は、神の国は近づいた悔い改めて神を信ぜよ、であり、病気治しです？だったらイエスそのものというか、本物そっくりなのですが、岸先生の伝道内容は説教とコンサートです。サクソ奏者としてかなりの腕前をもつ巡回伝道者は教会でサクソ演奏（賛美歌だけではないようです）をして、そのあと説教をするというスタイルを確立しています。これなら楽しいでしょうし、来年もまた来てねと伝道の予約も取れると思います。イエスの宣教にも病気を治す（盲人の目は開き、足萎えの人は歩く）という事項がありました。イエスを歓迎する町は多かったのだとおもわれます。もう行くの、まだいてよというようなことが福音書によく出てきます。

その際、汚れた霊に対する権能を授け、旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。
6:7b-9

イエスは弟子の派遣にさいして、このように注文をつけました。このことばをどのように解釈してどのように実践するのか。そうカリカリしなくても、その日、その時がくればおのずとその人その人に似合ったやり方がひらめく、与えられるのではないかなあ、と今のわたしは受け止めています。
